



完璧クールな生徒会長は

# デレるとエロい俺の姉

小説 高岡智空

挿絵 立花瑛

立ち読み版

第一章

姉ちゃんにとって、満点は赤点の取りそこない

006

第二章

8教科750点は当たり前、8教科900点取るときも

055

第三章

会議に出るだけで、鼻血を噴きだす出席者も

110

第四章

告白されても納得できないと、自分から告白する

153

第五章

イベント出演よりエッチの時間のほうが長かった

199

エピソード

252

## 登場人物紹介

Characters



最低つ……徹は変態  
絶対変態つ……



はや み おう か  
**早見桜花**

超ナイスバディ&美人顔、生徒会長まで務める人気絶大な完璧姉。成績も常に良くて、いいところだが実は…。

はや み とおる

**早見徹**

桜花を姉に持つ少年。彼女には今までツラ〜い目に遭わされてきたものの、ついに反撃の機会が！

「姉ちゃん……んっ、はぁ……はぁ、んむっ……ちゆるっ、じゆるうう……」

「んんううっ!? んあっ、やつ……ダメっ、徹……舌、は……あむっ……んっ……」

我慢ならない——とばかりに、気がつくとき突きだされた舌に吸いついていた。唇で挟み、ヤワヤワと何度も甘噛みを繰り返して吸い上げると、異変に気づいた姉が慌てて唇を離そうとする。けれどそれは許さない。徹は桜花の腰を抱き、頬に手を当てて顔を固定し、自ら身体を寄せて柔らかな唇の味を口腔に取り込んでしまう。

「んむうう……ぶあっ、はっ、ら、めえ……んぐっ、じゅぶう……んっ、が、がっこ、れ……見られ、ひゃ……んうっ、んっ、むうう……っ」

「はむっ、じゅぶっ、じゆるるっ、ちゅぽおお……ふあっ、はっ……いいんだって、姉ちゃん……これは、エロいことじゃなく、発音練習だからな……んちゅっ……」

やや無理のある言い訳をささやきながら彼女の髪を梳き、頭を撫でながら背中を愛撫し、唇を啄ばむように愛し続ける。舌を這わせ、舐め回しながら、恐る恐る出てくる美少女の舌を吸い立て、唾液を吸り上げた。喉奥に流れ込むトロリとした甘露の感触が、下半身にカアアツと熱を広がらせ、ズボンの奥の昂りが一気に鎌首をもたげる。

（甘い、これが……姉ちゃんの口中……唾も、めちゃくちゃ美味しい……じゆるっ）

そのまま、時折耳を擦ってやると、姉はいつものように身体を大きく跳ねさせ、泣きそうな表情を浮かべて恥じ入った。

「……んえ、れ、れん、しゅ……うう、んっ……ちゅぶ、ぢゆるっ、じゅばぁ……」

「ほ、れんひゅう……ほあ、ひらのうごき、まねひれ……れろおつ、ぢゅおお……」

突き放そうと胸に押し当てられていた桜花の腕が、ゆつくりと脱力する。その手が背中に回り、キュツと遠慮がちに抱き締められた瞬間、頭が痺れるような快感が全身を駆け抜けた。二人が一つの身体になったように密着する、そして唇が体液を交換し合う、その快感が行為をさらに過激にし、舌の動きが遠慮なくなつてゆく。

「はあっ、んぐっ……じゅるるっ、じゅおっ、ぷちゅう……ちゅっ、ちゅう……」

「んっ、あむっ、んつく……んぐっ、んじゅるるっ……じゅるるっ！」

甘い香りが口内から喉を滑り、鼻の奥へ突き抜ける。頭の中で姉の香りに蕩かされ、その感覚に促されるように舌を伸ばし、唾液でドロドロになった口内を弄る。

（……思つたより抵抗しないな、姉ちゃん。ディープキスはダメって言つてたけど、なんだかんだ甘いし……そういうとこ、やつぱ可愛いな……）

柔らかい舌のヌメる感触が絡まり合い、口粘膜が吸い上げる徹の舌を締めつけて扱いてくる。好き勝手されるまいとこちらから舌を動かし、歯の裏側や頬の内側をツンツン撫でてやると、抱き締めた身体が大きく震え、けれど抱き寄せてくる腕には力が入る。

（あっ……姉ちゃんも、俺のキス……欲しがってるのか、これっ……）

溢れる唾液を注ぎ込むと、桜花は驚いたように顔を上げ、そのまま喉を鳴らして飲み下してくれる。飲みきれない唾液は口内に溜めて互いの舌で攪拌し、もう一度分け合つてからゆつくりと飲み込む。恥ずかしそうに震える彼女の小鼻から、遠慮がちな呼吸で吐きだ

される息がかかっていた。

「んっ、ぢゅう……ふあっ、ふううう……んっ、ぷはっ……」

たつぷりと姉の痴態を堪能し、ようやく徹は唇から舌を抜き取った。頭の裏側を優しく撫でながら、目の前では見せつけるように舌を突きだし、姉の唾液の滴りを引き伸ばしてやる。うっすらと目を開きかけていた桜花は、その光景を目の当たりにして瞳を大きく見開き、カアツと顔を赤くした。

「……つつつ、やめてっ……それに、学校で、こんな……こと……つつ」

「姉ちゃん、キスしてるときもすっげえ可愛いのが……ほら、こっち……」

拒絶するような言葉だが、それに力は感じられなかった。その唇を閉ざすために徹は肩に腕を回して背中を抱き、手の平には溢れる質量の豊乳を持ち上げ、ムニムニと制服の上から揉みしだく。反対の手は太ももに這わせ、昨日たつぷりと舌で愛撫した淫柔肉のほうへと滑らせてゆく。すると桜花は周囲を気にしてか、慌てて身を振った。

「……ダメっ、だから……ここ、学校だから、徹う……んっ、ふああっ！」

「大丈夫だつて、今日休みで誰もいないし……うつわ、姉ちゃん、こんなに……」

チョンと軽く触れただけではつきりとわかる。姉の股間はおもらしでもしたかのようにグチヨグチヨで、ショーツはすでに用を為していなかった。お尻に下に敷いたスカートも水気を吸って重くなり、軽くめくり上げるとその奥から牝臭が広がってくる。

「~~~~~つつつ……う、や……やつ、あっ……くふっ、ううんっ……」

「恥ずかしがることないって、姉ちゃん……ほら、俺もこんなもん」

乳房から手を放し、そちらの手をスカート奥に侵入させ、ショーツの上から淫唇を優しく擦って刺激する。そうしながら自分のチャックを下ろし、いきり立ったペニスを引きずりだすと、姉の手を引いて亀頭に触れさせた。

「あ——う、か……硬い、し……熱い、徹の……こんなに……」

「そ。姉ちゃんのキス気持ちよくって、こんなになっちゃった……あ」

発音練習ではなく、はつきりとキスと言ってしまったのだが、桜花の耳には届いていないようだった。視線は股間に釘づけになっており、羞恥で頬を赤くしながらも、顔を背けられないように見える。

(つつ……これは、もしかすると……つつ)

亀頭を握らせ、先端の滲みを手の平になすりつけながらニチャニチャと軽く扱かせつつ、桜花にささやきかけた。

「姉ちゃん、口で……してくんない？ ほら、さっきの発音の通りに……歯だけは立てないように、つてことで……だめか？」

チュッと音を立てて耳朶に口づけると、か細い姉の肩がビクリと跳ねる。

返事はないが、彼女がペニスをジッと見つめているのは明らかだった。その視線、半開きの濡れた唇、そして熱い吐息を感じるだけで、股間の隆起はさらに硬くなり、それが余計に桜花の目を引きつけているのがよくわかる。

しばしの沈黙の間、彼女の肢体はずつと震えているのが腕の中から伝わっていた。そのまま答えを辛抱強く待っていると、コクンと喉を鳴らした姉が口を開く。

「……いい、よ……は、発音練習だし……仕方、ない……」

言ってしまったから、とんでもないことを承諾したと自覚したのか、桜花の頬が赤く染まる。けれどももう撤回させないとばかりに、徹は桜花の肩を強く抱き寄せた。

「つつ！　ありがとな、姉ちゃん……すっげ嬉しい」

「……っ、だから、ただの練習だつて……っ、くっ……んううっ、やつ……」

照れ隠しの言葉を吐こうとする桜花の淫部へ、感謝の印とばかりに手の平を這わせる。グチュ、ニチュウウ……と濡れた布地が擦れる音が聞こえると、真っ赤になった桜花は表情を隠すように顔を伏せ——徹の膝に体重をかけ、股間に唇を寄せた。

「……あんまり、触っちゃダメ……変なことしちゃうと、悪いから……」

「え……お、おう、自重する……けど、齒さえ立てなきゃいいからな」

噛まれることを危惧するより、これほどの美少女にフェラチオしてもらえするという悦びのほうが大きかった。だが、桜花は顔を伏せたまま動かない。少しの逡巡、けれどようやく決心がついたように顔を動かし、こちらを軽く見上げてからポツリとささやいた。

「……教えてくれてる、お礼だから……は、あ……んむっ、じゅる……」

「う、おっ……すっげ、ちょっ——うううっ！」

ヌルウウウ——と、熱々の粘膜壁が龟头を飲み込む感触に、声が上擦る。



「うおおおつつ!? な、なんじやこりやあつ……や、べつ……う、くうつ……」

唾液たつぷりに潤んだ口内粘膜が、ガチガチになつて躍動する亀頭にまとわりつき、頭が揺れ動かたびに、敏感な部分を転がされるような甘い刺激に襲われる。口の奥から溢れた唾液が、ダラダラと垂れ落ちて肉棒に塗されていくのがわかる。思わず腰が震え、ビクンッと脚を跳ねさせてしまうと、桜花が唇を触れさせたままで口を開いた。

「んえ……え、こえれ、いろ……?」

半開きの唇が亀頭を擦り、伸びた舌尖が裏筋に当たつて痺れるような快感を生む。なにより、上目遣いに見上げてくる姉の表情が艶めかしく、すぐにでも咥え込んで欲しいという欲求が一気に燃え上がった。姉にしてもこうすることに興味があったのか、不安そうにこちらを見つめているのに、漆黒の瞳の奥が好奇心にはキラキラと輝いている。

「ああ、すっげえ気持ちいい……そのまま、唾いっぱい口の中溜めて……そう、それで頬つべた窄めて扱いてくれ……っ、うっ、はっ……くあっ……」

指示した通り、元々からして柔らかく締めつけていた姉の口内がキュキュッと蠢いたかと思うと、いっそうキツく締まってくる。亀頭全体が粘膜襞でびつたりと覆われ、大量の唾液が熱い感触と舌の弾力に絡んで押しつけられ、ニユルッ、チュブウウ……と淫ら極まらない水音を響かせた。

「ああ、ほっ……おむっ、んぐじゅっ……じゅぼっ、ちゅぼおお……じゅるぼっ……」

頭を回転させながら、締めつけた唇で裏筋や亀頭の縁を擦り立て、何度も舌の腹が敏感

な部分を舐め上げる。くすぐったさと、それを大幅に上回る目の眩むような快感が肉幹の付け根に染み込み、ゆっくりと脊髓を這い上がって頭の奥を痺れさせた。

「はあっ、ふっ……っあっ……ねえ、ちゃ……そのまま、もつと、奥までっ……」

手でされるより何十倍も気持ちがいいと思えるほど、深く絡みつくような、想像を絶する快感だった。こらえようもなく声がもれ、姉の喉奥を突き上げる動きで腰が跳ね、膝がガクガクと躍ってしまう。そんな徹の要求に桜花はピクンと背中を震わせ、けれど素直に顔を埋め、肉幹をジュプジュプと口内に飲み込んでゆく。

「んもおお……おぐっ、ふっ……んみゆ、じゆるうっ……ぐぶっ、ぐぼおお……」

蕩けるような温かさ、そして柔らかな感触で肉幹を抜き、口内ではペロペロと舌を蠢かせている。すぐにでも牡液を放ってしまいそうなほど、圧倒的な快感が下半身を支配するが、一方的にやられているのも申し訳なく思い、徹は左手を動かして応戦する。

「んくうううっ?! んみゆっ、ぐっ……ぼあっ、はっ……さ、さわっひや、ら、めっ……へっ、ひいっ! ふあっ、あんっ、んじゆっ……ちゅうう……」

指を挿入してしまわぬよう細心の注意を払い、陰唇とその上の肉真珠の感触に神経を尖らせる。下半身を包む快感に心を蕩かされそうになりながらも、ショーツの隙間から滑らせた指で肉唇を割り開き、柔らかな感触を指の腹で丁寧になぞる。

「ほら、姉ちゃんも……あれ、この硬いのって……もしかして、クリ?」

「~~~~~っ! んぐううっ、はむっ、んっぐ……ぐぶうっ、ちゅぱっ……」

筋を触るように上下に動かすと、上方に動かすたびに姉の肩が勢いよく跳ね上がっていた。その部分を重点的に転がせば、コリコリとした弾力が指先に返ってくる。

触るたびに姉は口の動きを止め、代わりに頬を窄ませて肉棒を包み込み、刺激を与えてくれる。歯を立てぬよう気をつけているのだろう、その気遣いがたまらなく嬉しくて、もっと気持ちよくしてあげたいという衝動に駆られた。

「いいよ、ゆつくりしてて……ここ、どう？ 気持ちいい？」

「おむっ、んっ……んきゅううっ……くっ、ふうんっ……んっ、ちゅおっ……」

下腹部と淫唇の境目辺りを押し上げると、その動きに引かれて包皮がめくれ返り、真っ赤に充血した肉芽が顔を覗かせる。親指で肉芽の上を優しく撫でると、果実を握り潰したかと思うほどの牝果汁が肉襞を潤ませ、太ももが強く締めつけられた。と――。

「おむっ、んぐっ……じゅるううっ、ちゅっ、ちゅぶううっ……れおおっ……」

力の入った姉の唇が、その拍子にペニスを強く吸い上げる。躍る舌が肉幹をベロリと舐め上げ、裏筋を突くように舐め回し、また舌先は根元へとくねり下りていった。生き物のように意思を持って這い回る舌技に下半身は躍り続け、みつともなく口内でペニスを跳ねさせまくっているのを自覚させられる。

（ふっ、くっ……くあああっ、き、もち、いつ……うっ、ぐうううっ……）

上下に擦る舌の動きは、肉棒の中心にある尿道を刺激して、牡欲の誘い水となっているようだった。尿道の半ばまで精液が込み上げ、気を緩めればすぐにでも放出してしまいそ

うなほど、桜花の口技による快感に翻弄される。こちらが責めれば彼女の身体も反応を示すのだが、それに溺れる様子はなく、自分の肉悦を訴えるように奉仕の熱感を高め、濃厚な愛撫を唇から返してくる。

「はぐつ、うつ……姉ちゃん、いい、すつげ……最高……つつ」

「ん……じゆるううう……ちゅぽおとおつ、じゅぽつ、れりゅうう……」

柔らかな粘膜を牝蜜でコーティングしてやれば、スカート越しの美尻がプルプルと揺れて、新しく溢れた淫液に手の平がドロドロになる。剥きだしになった陰核は、なぞっているだけで絶え間ない快楽を生むらしく、姉の口からくぐもった呻きがもれていた。

けれど口奉仕は止まらず、慣れてきたのかどんどんスムーズに頭が動き、肉棒の根元から亀頭の先端までが唾液塗れになり、最高の粘膜穴で抜き立てられてしまう。奥で煮え滾る性欲がすべて搾り取られる——そんな錯覚を覚えるほど、気持ちが悪かった。

（ううつ、くそおつ……こっただけイクとか、それだけは勘弁な！）

「んぐつ、んむううう……つ、んつ、きゅふううつつ!? んうつ、んんつ……」

陰核の包皮を摘み、皮オナニーのようにクリトリスを抜き立て、濡れそぼった肉華弁を撫で擦ると、お尻が跳ね上がる。豊尻を覆う制服のスカートには黒い染みが滲んでおり、イヤイヤするように柔らかく振られるその動きは、おねだりのように感じられた。はしたない動きに劣情をそそられ、徹は肉芽を抜きながらその突端を指で強く叩いてやる。

「んぶううつ、ふあつ、やつ……あうつ、ひやめつ……つく、イ……クッ……んっ」

「え、姉ちゃん——うおっ、おっ……わっ……」

徹の腰と太ももにしがみついていた手に力がこもり、ギューウウツと力いっぱい抱き締められる。そのまま淫部に指を這わせて手の平全体でマッサージするように撫でると、ビクビクウツと桜花の腰が躍り、太ももが手首を締めつけた。

「くふっ、ううっ……う、動い、ちゃ……はうっ、んっ……んちゅ、じゅるうう……」

淫肉筒の奥からはトロトロの蜜液が溢れこぼれ、皿のようになった手の平の上に溜まってゆく。徹が股間に埋まった姉の頭を優しく撫でると、子猫のような声を響かせながら肉棒をペロペロとしゃぶる。けれどその身体はいまだ、快感に打ち震えていた。

（俺の手で……マジで感じやすいな、姉ちゃん……めっちゃエロくて、可愛い……）

動くなど言われても、さらに二度三度とクリを抜き、肉襞を撫でてみると、太ももがモジモジと揺り動かされ、徹の制服を握る手がさらに強く握り締められた。その動きがたまらなく愛しくて髪を梳くと、やがて落ち着いたように彼女の顔が上がる。

「はあ、はあ……んっ、もう……バカッ、変態……んっ、くうんっ……」

その艶めかしい表情に、徹は言葉もなかった。汗に塗れた顔に髪の毛が張りつき、上気した桃色の肌は明らかに事後の雰囲気醸しだしている。瞳は潤み、その目でこちらを咎めるように見上げている。それでいながら唇がペニスに触れたままというギャップが、性欲を煽って肉棒をビクンツと大きく跳ねさせた。

「……続ける、ね……はあ、あむっ……んじゅっ、れろっ、ちゅばああ……」

肉棒を飲み込み、舌が縦横にくねって肉幹のあらゆる部分が舐められる。時々、敏感な部分に擦れると腰が跳ねてしまい、姉の喉奥を突き上げてしまう。けれどそれでむせることもなく、桜花は感じる部分を発見したのを悦ぶように唇を窄め、舌先をその部分に這わせ、重点的にねぶってくる。

「おぶううつ……んぐつ、じゅぶぶつ、じゅろおおつ、おむつ、んいつ……」

何度も弱点を撫でられ、桜花の喉奥を突いてしまうと、唇をキュッと締めつけた桜花の歯先が軽く裏筋を食み、捻るように締めつけた。その瞬間、眩むような甘衝撃が頭の奥へ突き抜け、徹は腰を大きく震わせて低く声を響かせる。

「つつ……イクッ、姉ちゃん……そのまま吸って、根元から強く扱いて……くうつ！」

すでにギリギリまで追い詰められていたペニスは一瞬にして臨界を迎え、鋭い快感に押された精液が激しく噴出してゆく。

——ビククウウツ、ビクツ、ドビュルツツ！ ビククツツ、ビクウツツ！

「んぐううつ……んつ、ふうつ、くつ……んぐつ、ふつ……ううん……」

深く咥え込まれた肉幹全体に、姉の温かい口柔肉の感触が広がり、触れているだけで搾り取られるようだった。唾液と混じり合った精液の熱い感触が絡み、桜花が頭を振ってペニスを扱くと、粘液の塊が敏感になった亀頭に浴びせられ、背筋がゾクゾクツと痺れてゆく。たまらず腰が跳ね、姉の口から与えられる肉悦を訴えてしまうのが恥ずかしいが、そうなくても仕方がないほど桜花の口内の感触は絶品だった。



生徒会役員の立場から、渋々といった様子でそう答える宮崎副会長。彼の悔しそうな姿を見ることができ、なんとなく溜飲が下がる思いだった。

（さーて、そんじや行こうかね、姉ちゃん？）

無理をさせた謝罪もしなければと思いつつ、会議室に頭を下げて部屋を後にする。

「ほれ、ちゃんと立てって。保健室行くぞ、歩ける？」

「んっ、あつ……はふっ、ううう……な、なんとかあ……うくうっ、くあつ……だ、けどお……徹の、せいっ……でしよ……んうっ、はああ……」

そう言いながら桜花は徹にしがみつきの、フラつく脚を強引に立たせる。スイッチは切つてゐるのだが、歩くだけで乳房が揺れたり、股間のローターが擦れたりするために、一歩進むたびに耳元で艶めかしい声を響かされてしまう。しかも腕に抱きつくような体勢のせいか、豊乳が腕を包むようにして、ムニムニと潰れながら上下に擦れてくる。

「ね、姉ちゃ……んっ、も、もうちょいだから……ふおおっ……」

ムクムクとそり立つ股間をなだめすかしつつ、ようやく辿り着いた保健室。しかしドアを開けると中にいた保険医は慌ただしそうにしており、道具をまとめ、どこかへ出かけようとしていた。

「失礼しまーす、あの……ベッド借りてもいいですか？」

「はい、どうぞ！ ゴメンね、体温計はあの棚から適当に……って、あら？」  
 応対しようとした保険医が、連れられてきた患者の顔に気づく。



「珍しい、生徒会長さんじゃない。どうしたの？」

「あー、えつと……ちよつと疲れが出たのか、熱があるみたいです。あ、すぐ家に連絡して迎え呼びますから、こつちにはお構いなく」

保険医は手の平で桜花の熱を軽く計り、それほど高熱でないことを確認すると、安心した様子でウンウンと頷いた。

「うん、これなら大丈夫そうね。それじゃ悪いけど、ここは任せておいていいかな？ 運動部でケガ人が出ちゃってね、病院に付き添わないといけないのよ。なにかあったら他の先生に声かけてちょうだい、ベッドは自由に使っていいから」

それじゃね、と言ひ残し、保険医はバタバタと走り去ってゆく。これで桜花が重病なら問題だったが、いまの状況ではむしろありがたい。

「——つーわけだから、姉ちゃん？ とりあえずベッド行こつか」

「あうっ、んっ、んううっ……は、早くうっ……あっ、んあああ……」

着崩れた制服を正そうともせず、トロトロの表情で泣きそうになりながら訴える姉の姿に、バクバクと鼓動が高くなってきた。もはやベッドに行くのももどかしく、仕切りのカーテンを閉めるなり姉に抱きつき、唇を奪ってベチャベチャと舌を這い回らせる。

「んむううっ、んぐっ、じゅるっ……ふあっ、はっ、とお、るっ……んぐうううっ！」

両手を恋人握りで絡ませ、ベッドに押し倒しながら、ジュパジュパと音立てて唇を吸う。刹那、桜花の指先に力がこもり、横たわった細い体軀が切なそうに震えだした。

(あえ……姉ちゃん、これって……んっ)

キュウツ、キュウツ、とりズミカルに握られる両手、小刻みに揺れる睫毛。そして腰を前後に振り立てるような、卑猥に見える身体の痙攣——思わず唇の動きを止めると、自分の反応に気づかれて羞恥を覚えた桜花が、真っ赤になって唇を離す。

「んぢゅ……ふあ、はああ……バ、カア……み、見ない、れえ……んっ、ひうっ……」

「姉ちゃん、イッただろ」

ニヤニヤと笑いながらストレッチに問うと、姉は真っ赤な顔を背ける。

「そっつ……そんな、わけないっ……キスだけで、なんて……っ」

「あ、そう？ でもローターのせいでイク寸前だっただろ？ んー、そうだな……せっかくだし、このままイッチやってくれる？ 自分でやってさ」

「なん、で……くあああんっつ！ あひゅっ、ひっ……きああっ！」

スイッチを入れてやると、制服の奥で三つのローターが振動を再開させた。すると姉は突き抜ける快感に身を振り、ベッドの上でビクンビクンと身体を跳ねさせながら、汗に塗れて快感に蕩けた赤い顔を上向けさせる。

「くひやうううっ、うううっ……と、徹、のっ……バカアッ、あんっ、あっ……」

その身体を抱き起こしてやり、自分の脚の間に座らせ、背後から抱き締める。ブレザーを脱がせてベッドの柵にかけておくと、すぐにブラウスのボタンを外しにかかった。下から覗く清純な白のブラをずらし、ローターを先端に張りつけた豊乳を持ち上げ、震えるオ

モチャごと乳肉へと押し込んでやる。

「んあああつつ!? ダメっ、それええつつ、あひっ、イクッ……くああああ——つつ!」

汗に濡れた張りのある肌の感触とともに、柔らかな淫脂肪の手触りが伝わりと同時に、快感に身悶える姉の震えが手の中に染み込んでくる。両腕の中で姉が絶頂を告げ、顔を伏せようと身を低くする。けれどそれを許さず、顔を押さえて振り向かせ、唇の緩んだだらしない顔を真正面から見つめ、唇を奪ってしまう。

「姉ちゃん、可愛い……んじゅっ、じゅるるっ……じゅぶっ、ちゅぶうう……」

「ふあっ、ひゃ、ううん……んぐっ、んじゅうう……ちゅるっ、れろおお……」

抵抗の弱まった姉の手を掴み、片方を乳房に、もう片方をショーツの奥へと滑り込ませる。それぞれの指にローターを摘ませると、一番敏感な突起に当てさせ、そのまま自分で達するように命令する。

「ほら、一番弱い振動だからな……ちゃんと押しつけないと、イケないと思うぜ。ああでも、姉ちゃんの感度だったらすぐイケるかも……会議でも感じまくる変態だもんな」

「んつぶあっ……はっ、だえ、が……くふうううっ、ふあっ、あっ、はああんっ……」

耳元を舐めながら、ローターを持つ手を操って、肉芽をグイグイと押し込む。すぐに力を抜いて、剥き上がった淫粒を撫でるような動きを教えてやると、観念したように桜花は自分で、その動きをトレースし始める。

「んううっ、もおっ、やつ……ヤダ、こんなあ……変態の、弟……くふうつつ!」

言いながらも手は止めず、秘部だけでなく乳首のローターも同じように動かし始める。いや、そちらはクリトリス責めとは違い、少し強めに押しつけて乳輪をなぞり、自分の動きに焦れながら、時間をかけて乳頭を圧迫するような動きに切り替えていた。

「ふーん、それが姉ちゃんのおナニーのやり方かあ。エロいなあ、しかもマゾっぽい」

「~~~~~つつ、バカッ、変つつ……んううつ、た、あい……ちがう、これは……んっ、あうつ、はっ、はああ……」

耳を舐める弟の言葉にもゾクゾクと背中を震わせながら、それでも自慰をやめずに快感を貪りつつ、恨みがましい視線を向けて桜花が答える。

「こえ、はっ……はあっ、んっ……と、徹の、手……のお、ま……あんっ、ね……」

言い終えた瞬間、桜花は耳まで赤くして視線を背けた。もう二度と言わないとでもいうように口をキュッと引き締め、遠慮がちに指先を動かして性感帯に押しつけた。

「——つつ……つま、え……なんっー可愛いことっ……つつ！」

自分の手が、乳房を弄る動きを真似て自慰をしていると——とてつもなく恥ずかしい告白を躊躇なくされ、ズボンの奥の屹立が限界まで硬くそそり立つ。

「んはああっ……あ……徹の、硬くなつて……んうっ、当たつてるう……ああんっ！」

ローターが剥がれて落ちたローターを拾い、二個を使つて乳首を扱くように動かす桜花。それだけでなく腰を動かし始め、ズボンの上からペニスを尻コキしてくれる。

「ううっ、ああ……姉ちゃん、気持ちいい……姉ちゃんも、気持ちいいか？」



「んはあつ、はあつ、あうう……うん、き、気持ち、いい……くひゅううつ！」

乳首が弄られていないほうの乳房を揉みしだき、耳朶を口に含んでジュルジュルとしやぶり立てる。たつぷりの汗の味が舌に届き、鼻腔に滑り込む牝臭が脳をクラクラとさせ、腕の中の女の味を全身に刻み込んでくるようだった。

「あうつ、んはああつ！ あいつ、イ……キ、そつ……んくうううつ！」

「いいよ、イッて……好きなだけイケよ、姉ちゃん……ちゅうう……」

首筋に吸いつき、思いきり肌を口腔に取り込む。赤い痣がついてもお構いなしに、二つ三つと跡を残し、桜花は自分のモノだと印をつける。その行為で自覚させられる——徹はどうしても、姉を独占してしまいたいのだ。

（あつりえねえ……あんだけ姉ちゃんにムカついてたと思ったのに、実はシスコンだったとか……恥ずかしいってレベルじゃ……あー、くそっ！）

「はひゅつ、とお、とおつ……りゅうつ、んいつ、ひつ、ぐつ……イクうううつ！」

舌を這わせてうなじをなぞり上げた瞬間、姉の喉奥から高い声が響き渡る。だから徹は耳元に口を寄せて、ささやいて命じる。

「オナニーでイキます、だろ？ お姉ちゃん、オナニーでイクって……な？」

「んっ、なつ……バカッ、やつ、らつ……ひいんっ！」

抵抗の声を上げながらも、すぐさま限界を迎えた姉がググツと背中を反らしてゆく。

「ほらっ、イクなら言つてよ！ お姉ちゃんオナニーでイクっ！ ほら！」

「あひいいつつ、ダメっ……もおおっ！ んあつ、イクツ、お……お姉ちゃんっ、オナ……ニーでえ……んいつ、イクううつつ！ くあああんつつ！」

ビクビクビクウウツッ！ と姉の肢体が飛び散らんばかりに跳ね上がる。抱き締めた腕の中で、なにかから逃れるように身を振り、けれど徹の腕にしっかりとしがみついて、ガクガクと頭を振って官能の渦に飲み込まれてゆく桜花。

「手、止まつてるぞ……こうやって、イキながら押しつけないと」

「んくあああつつっ!! ひはっ、放し、てっ……んひいいいつつ！」

——ビクビクツ、プシュツ……プシャアアツツッ！

指先を上から強く押し、硬く尖った肉芽に思いきり押しつけると、ショーツに突っ込んだ手の中に熱い迸りが噴きかかてきた。オシッコかと思つたが色も匂いもなく、サラサラとした感触が残るばかり。

（うおお!! え、これ……もしかして、潮噴きつてやつか……マジかよ……）

快感の奔流によつて晒した姉の痴態に、感動にも似た興奮が込み上げてくる。手の平もショーツも完全にグチョグチョで、引き抜いた指先からはポタポタと淫らな滴が落ちていく。ベッドから脚を投げだすような体勢だったことが幸いし、床とベッドの端が汚れたに留まつたが、立ち上がる淫臭はむせ返るほど濃厚だった。

「はあっ、あつ、んううつつ……んはあっ、はあああ……うう……」

「よしよし、姉ちゃんゴメン、強くしすぎたな……でも、すっげえ可愛い……」

ビクウウウツ！ と大きく跳ね上がった背中が、そのまま一気に丸められる。縮こまった体勢でガクガクと脚を痙攣させ、突きだした美尻がグイグイと徹の腕に押しつけられ、快感の極みを訴えかけてきた。

『ほらっ、イケっ……みんなに見られながら、イッチまえよ！』

「んあっ、あっ、イ……イクッ、イクううっ……んっ、ふううう……っつ！」

脚が内股に折れて太ももがキツく寄り合わせられ、同時に膣肉が指を食い千切らんばかりの力でキュッ、キュウウツと噛み締めてくる。溢れる淫液はさらに濃くなってショーツから溢れこぼれ、甘酸っぱい臭気を解答席のこちら側に充満させながら、太ももをテラテラと光らせて、桜花のニーソックスへ吸い込まれてゆく。

そんな姉のいやらしい姿を拝みながら、徹は早押しボタンを押す。問題は「桜花の得意科目はなにか？」というもの。その答えは一つしかなかった。

「そうですね……得意科目はない、これが正解だと思います」

事前に聞かれていたとすれば、桜花はここで一つの科目を挙げたりはしない。徹が教えてくれないけれどもできないということを実感し、それでも会長としてのイメージを崩さないで答えようとする彼女なら、こういう答えになるはずだった。

そんな姉の性格を予測した弟の解答、結果は――。

「正解！ なんと優勝したのは、一年代表の早見徹くん！ おめでとうございます！」  
徹の優勝を司会者が口にし、煽られた観客が大きな拍手を送ってくれる。



『おい、見ろよ、姉ちゃん。姉ちゃんがイッてるのとこ見て、みんな拍手してるぜ』

「くひっ、ひあっ、んああああっ！ あふっ、い、いやああ……んくっ、くうんっ♥」

大勢の人間に見られていることを実感し、さらに拍手されながら絶頂する羞恥に悶え蕩け、桜花がビクビクと身体を跳ねさせる。徹はそんな姉の膣内で指を捻り動かすのに、夢中になっていた。

ザラついた粘膜壁に指がしゃぶられ、擦っているだけでこちらまでイッてしまいそうなほど心地よい。しかもそれが、姉の絶頂に合わせてさらに激しく蠢き、クチュクチュとくぐもった水音を響かせて、温かな粘液の感触を擦り広げてくるのだ。

『イッてる姉ちゃんのマ○コ肉、めちゃくちゃ気持ちいいな……くうっ』

「はふっ、んあっ、う、うれひい……んはっ、んきゅっ……わら、ひもっ……んっ、きい……気持ち、いいよ……ふあっ、あひゅうっ♥」

ビクッ、ビクッと全身を小刻みに震わせ、膣の動きで絶頂を訴える桜花。一度達したくらいではまだ足りないと言っても言うように、根元まで咥えた徹の指を放そうとせずに蜜壺で吸い上げ、溢れる牝蜜でトロトロに潰け込んでしまう。

『姉ちゃんの変態、ここ外だつーのに……しかも人前だぜ？』

そんな言葉も届いていないのか、桜花は蜜壺で味わう指の感触に溺れ、細かな絶頂に身を委ねているようだった。そんな桜花の第一声を取ろうと、司会者が近づいてくる。

『やべっ……おい、姉ちゃん、しつかりしろ、おいっ！』

「いやー、残念でした、早見会長。いまのお気持ち、率直にどうぞ」

徹の警告も虚しく、呆けたままの桜花に司会者が声をかけた。と――。

「んっ、んんう……さ、さいこお、です……っ♡」

甘えるような熱っぽい声で、桜花はニコリと微笑んでそう答える。

上気した頬、乱れて張りついた髪、潤んだ瞳――そのあまりに淫靡な雰囲気呑まれたか、司会者も一瞬だけ言葉を失ってしまったようだった。

「――あ、あ、ありがとう、ございましたあつ！」

イッた直後の顔を間近で拝み、艶のある声を聞かされた司会者は前屈みになりながらも、会場を煽るために呼びかける。

「負けてもお、最高とのこと！　まさに、姉と弟の真剣勝負でした！　皆さま、二人のフライングリストに大きな拍手を！」

地鳴りのような拍手を浴び、またも全身を痙攣させた桜花は、膂肉を經由して絶頂を伝えてくる。それを見た徹は、とりあえずバレなかったことで安堵のため息をつき、やがて込み上げてきた思いを胸中で叫ぶ。

（つたく、このエロ姉はっ……外でイクような変態には、お仕置きしないと！）  
すでに臨戦態勢に入った股間の昂りをこらえつつ、気をはやらせるのだった。



メインイベントが終わり、一般客もそろそろ帰ろうかという時間帯には、辺りもかなり

薄暗くなってきた。

そんな薄暗がりには校舎内にも広がっているが、その一つの部屋からはまるで光がもれておらず、けれど中からは衣服の擦れ合う音、そして二つの艶めかしい息づかいが響く。

「はあっ、んじゅっ……じゅるっ、れろおお……いやあ、ヤバかったよなあ、もうちょいでバレるとこだったんじゃないやねえ？」

「んちゅっ、ちゅばああ……ちゅるっ、んうう……も、徹の、せい……ひゃうっ♥」

光源は窓から差す、学園祭のライトアップのみという、ほんのりと照らされた生徒会室で、徹と桜花は互いの顔や唇、指や首筋と、あらゆる部分を舐めしやぶり合い、唾液塗れになって抱き合っていた。

この直前、イベントの表彰で徹がインタビュースを受けたり、桜花がコメントを取られたりしていたのだが、徹はともかく桜花の応答がかなり危なげだった。イッた直後ということで呂律が微妙、受け答えも呆けた感じになっており、なによりその艶めかしい表情のせいで、放っておけば会場に妙な空気が流れた可能性もある。

ともあれそれをなんとかフォローし、明日のデートの計画なども聞かれたりしたが、家でゆっくり話し合いますと誤魔化して、つつがなく表彰を終わらせた。

そのあとはこうして、桜花を抱えるようにして人のいない場所を探し、無人の生徒会室に潜り込んだというわけだ。

「まったく、悪い生徒会長だ……鍵持ってるからって勝手に勝手に入って、弟に舐められまくっ

て、マ○コこんなグチョ濡れにしちまってさあ？ ほらっ、なんとか言えよ！」

クチュウウツと音を響かせながら指を膣口に捻じ込み、首筋を舐め上げる。完全に出来上がった桜花の肉体は指をなんなく飲み込み、けれど淫肉を緩めることはまるでなく、チユパチユパとフェラチオのように吸いついて、動かさなくても扱かれているような快感を、指全体に伝えてきた。

「はうっ、あうっ、んはああっ……らっ、てええ……とお、るっ、があ……んふっ、ふああっ！ 徹があっ、悪い……あんな場所で、イ……イカ、せるか……らああっ!？」

淫粘液を掻きだすような指の動きで、膣上襞をゆつくりと擦り上げる。そうしながらシヤツのボタンを取り、下から現れた豊乳を、ピンクのブラの上からニユムニユムと突いて形をひしゃげさせてやる。

「そっかー、俺のせいで……ブラの上からでもわかるくらい、乳首こんなピンピンに勃起させちゃってんだよなあ？ ほら、わかるか、これ？ 押し込んだら指にコリッコリ当たってきて……姉ちゃんがめっちゃめっちゃ感じてるって、はつきり教えてくれてる」

「~~~~~っ、い、いじ、わるう……んはあっ、ふあっ、あひゅううっ……」

弟の指摘に顔を真っ赤にして恥じ入り、指先から逃れようと桜花が身を振った。けれど机に腰を押しつけさせて身体を固定した徹の腕から抜けだせず、暴れるたびにブレザーが着崩れ、皺だらけになり、肩や腰の露出を激しくしてゆく。汗に塗れ、ボタンを外されたカッターシヤツは肌に張りついて身体のラインを浮き彫りにし、絡みつくブレザーとの対

比が淫猥な雰囲気醸しだしていた。

（あー、くそっ……なんでこう、姉ちゃんはエロいんだよ！）

辛抱たまらず、乳房を突いていた指を放して背中に回し、ホックを外す。そのまま、いちいち脱がせるのも煩わしいと言わんばかりの手つきでブラを上には押しずらすと、窮屈な拘束を失った乳球がブルンッと弾み、冷たい空気の中に曝けだされた。

「ひゃんっ……やつ、徹う……恥ずかしい、んっ、ふああっ！」

じつくりと、真正面から乳房を眺めながら、指先で乳輪の周りに円を描く。その感触でピクピクと身を振る桜花の動きに合わせ、張りのある双丘がタプンと躍った。

プックリと膨らんだ乳輪をなぞると、乳房だけでなくニプルまでが震えて反応し、感じているのだと主張を繰り返す。けれど強引に触れたりはずせず、指の腹で根元から先端まで軽く、焦らすように撫で上げると、桜花の唇から甲高い嬌声が溢れた。

「んはああっ♥ あうっ、んっ……やああ、徹う……そんなにしちや、ふああ……」

「そんなにつて、まだ撫でてるだけじゃん。それともなに、もっとして欲しいの？」

膣口からも指を抜き、両手で左右の乳首を弄ることにする。それでもやはり激しい動きにはせず、乳輪を二本指でゆつくりと擦りながら、勃起した乳頭を指の腹で軽く叩いてやるだけ。跳ね返るような弾力が指に伝わり、時折力を強くして押し込むと、白い乳肉にニプルが埋まりそうになって、桜花がビクビクと身を振って快感を訴えてくる。

「ふあっ、はひやつ、んあああ……んくううっ！ くあっ、ひい、いいいん……」

乳房を持ち上げ、ズシリとした重みが手の平に伝わったところで放してやると、タプンツと勢いよく豊乳が弾み、何度もたわんでは形を元に戻す。手の平で握るとなんの抵抗もなく指は沈み込み、しつとりと吸いつくような、それでいて張りのある肌の感触が心地よかった。そうしている間にも、すでに触れていない膣肉は緩みっぱなしらしく、だらしなく淫涎が流れ落ち、姉の太ももどころか脚全体を濡れ光らせ、腰かけた机の上と足元に、濃厚な牝臭が漂う水たまりを広げてしまう。

「とお、るっ、徹うう……んおっ、おね、がいつ……ひあっ、あうっ、んはああっ！」

切なげに腰を揺すって、桜花は伸ばした脚を腰に絡めようと擦り寄ってくる。けれど徹は少し体勢を低くして背中を曲げ、手だけでは持て余すほど貪欲な姉の乳房に、顔を寄せて大きく口を開いた。

「んああ……はむっ、んぷじゅっ……じゅぶううっ、れるっ、れりゆりゆう……」

「ひきいいっ、んひいいいいんつつ♥んひやつ、ひやらっ、とお、りゅっ……くふううんつつ！ はふっ、はああ……」

唇に肌の温もりが伝わり、口内に汗と入り混じった姉自身の甘い味が広がってゆく。舌全体を使って、乳房に唾液を擦り込みながら舐め上げる。一気に舐め上げる動きに加え、舌を小刻みに動かしてチロチロと肌を刺激し、その延長として乳輪に舌先を這わせる。まだ突起部分には触れていないのに、それだけで桜花の背中がフルッと小さく跳ね、さらなる刺激を求めるように胸が突きだされた。

ブルンッ、タプッと双丘を揺らして、その先端をなんとか徹に愛撫させようと、姉が嬌声を響かせて身を振る。それでも徹はその要求を退け、徹底して白肌を舐めしやぶり、ヒクつきっぱなしの乳首を目で愉しみながら、肌の味を堪能する。

「はむううっ、れろっ、んちゅううう……ちゅぶっ、はぁ、れろおお……んぷっ、はぁ……綺麗だよなぁ、姉ちゃんのおっぱい。それに感度もよくて、最高だぞ」

「あひゅっ、は、つい、が……とお……んあっ、ら、けろお……くひゅっ！」

称賛の言葉に喘ぎながらも律儀に返事し、けれども声を乱れさせて桜花が訴える。

「お、お願い……さ、先っぽもお、してえ……んあうっ、はっ、んはぁ……」

豊乳をひょうたんのようにひしゃげさせ、乳輪に唇を宛がって乳首を口内に含む。けれど刺激はしない、そのまま唇だけを動かして熱い吐息だけを乳頭部分に触れさせる。

「くふっ、ふぁ、んんうううっ……なん、れえ、徹うっ……ひうっ、ひいん……」

上擦った声が蕩け、口内に含んだ乳首がブルブル震えだすのが、空気の感触で伝わってくる。敏感な乳性感帯が弄られるのを今か今かと待ち望んでいた心が緩み、彼女の緊張がプツリと切れたのを感じ取り、徹はようやく、けれど思いきり口内粘膜を窄めた。

「おむっ、んじゅるるるっっ、じゅぶううう……んぐっ、んいっ……」

「はひいっ……んきっ、ひいっ——」

唾液に満たされた口腔に乳首を包み込み、先端を歯先で少し強めに噛み転がした。その瞬間、桜花が裏返るほどの甲高い大声を叫び上げ、背中を思いきり反り返らせる。

「いひつ、ひああああ——つつつ♥♥んあつ、はああつつ、イクううつつ！」

歯を押し返すような弾力で乳首がさらに膨張し、片手で引き寄せた桜花の腰がビクビクと激しい痙攣を繰り返す。それと同時に、股間からは水風船が破裂したような飛沫が、プシヤアアアツツ！と勢いよく噴きだし、真正面に立つ徹のズボンまでドロドロに濡れ汚してしまふ。それでも徹は止まらず、姉の乳首を挟み潰して擦り、音が響くほど強く吸い立てて快感を送り込む。

「んくああつ、はひつ、ひいいんつつ！んひつ、イクツ、イツてるのおつ♥」

一度の波だけではない、絶え間なく快楽電流を送り込んでやると、桜花は夢中になって徹の頭を抱いて身を振り、腰を跳ねさせ続けた。そのたびに、プシユウウツ、プシユウウツ！と水流が噴きだして、瞬く間に生徒会室に床には大きな淫水だまりが広がってしまふ。もはや淫唇は閉じなくなるほど膣口を大きく開いて、全身と同じようにヒクついているであろうことが、見なくても容易に想像できた。

「んつ、ぐ……ふあつ、はああ……どう、姉ちゃん？よかった？」

「とお、りゆうう……んう、きも、ひ、いいよ……あむつ、ちゆる、べろおお……」

焦らしに焦らしてようやく与えられた快感で、一瞬にして達してしまった姉は涙と涎でボロボロの顔になっていた。それでも変わらぬ美しい顔に近づくと、我慢の限界だと言わんばかりに激しく、桜花が唇に吸いついてくる。

「あむつ、ぐちゅつ、じゆるううつ、ふむつ、んちゅう……じゆるつ、れるう……」





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takentí Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



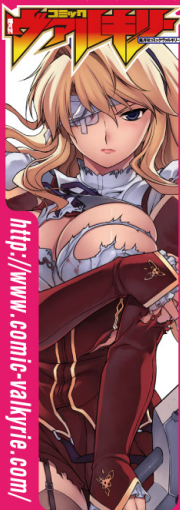
電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のお愉快なBlogも更新中!



<http://www.comic-alkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!